

令和 4 年 5 月 19 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K15188

研究課題名(和文) 建築家・吉田五十八の住宅作品にみる保存と継承

研究課題名(英文) Preservation and Succession in the Residential Works by Isoya Yoshida

研究代表者

大井 隆弘(Ohi, Takahiro)

三重大学・工学研究科・助教

研究者番号：40757986

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、吉田五十八(1894-1974)が手掛けた住宅作品のうち、現存する13作品を対象として、現在までの保存や継承の経緯を明らかにするものである。図面や文献調査、現地調査、関係者へのインタビュー、さらに明治期以降の土地所有者の履歴調査を通して、吉田作品における位置付け、保存・継承の経緯、竣工後の改修等の内容を明らかにした。これにより、各吉田作品がもつ「建築的価値」が明確になり、またより幅広い「歴史的価値」が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、吉田の現存する13の住宅作品を、保存や継承の成功例として捉え、各作品の価値付けの他、保存や継承に至った経緯を、修理工事、耐震改修といった工事の内容とともに明らかにしている。近現代住宅の保存や継承については、今後も活発な議論や活動が行われると予想されるが、本研究はそうした議論や活動に対して重要な知見を提供するものと思われる。また、本研究の存在が、吉田作品の各所有者や関係者相互がより関係を深め、保存活用の一助になることを期待している。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on 13 existing residential works by Isoya Yoshida (1894-1974) to clarify the history of their preservation and succession up to the present. This study is based on drawings, literature review, field surveys, interviews with related parties, as well as a historical survey of the landowners. As a result, the following information was obtained for each of the 13 works: (1) their position in Yoshida's works, (2) the history of their preservation and succession, and (3) the details of their post-completion renovation. This clarified the "architectural value" of Yoshida's works, as well as their broad "historical value".

研究分野：日本建築史

キーワード：吉田五十八 近代住宅 保存 継承

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

近年、建築歴史・意匠に関わる分野では、近現代建築の保存や継承に関する議論や取り組みが活発に行われている。例えば、2018年度日本建築学会大会(東北)の建築歴史・意匠部門の研究懇談会のテーマは「モダニズム住宅の継承とその課題」であり、DOCOMOMO Japan や住宅遺産トラストによる近現代住宅の保存や継承に関する活動、聴竹居(藤井厚二,1928)や旧日向別邸(ブルーノ・タウト,1936)、三岸アトリエ(山脇巖,1934)等の近代住宅、さらに湘南茅ヶ崎の家(吉村順三,1967)や白の家(篠原一男,1966)といった現代住宅について、保存や継承に関する事例が報告された。筆者も、吉田五十八(1894-1974)が手掛けた現存する住宅作品を紹介したが、戦後も含めた20世紀の建築作品が文化財としての価値を持ち始め、その魅力を広めようとする研究やアーカイブ、展示といった活動も盛んに行われている状況がみてとれた。しかしながら、数多くのモダニズム住宅が解体の危機にさらされている状況にも触れ、改めてその保存や継承の難しさを痛感した。今後も、活用を視野に入れながら、多くの保存や継承の成功例を蓄積し、そこから多くのヒントを得ることが重要と思われる。

さて、筆者が紹介した吉田五十八(1894-1974)は、日本の大正・昭和期に活躍した建築家である。数寄屋住宅を端緒に日本建築の近代化に生涯を捧げ、「近代数寄屋住宅の大家」などと評されている。東京美術学校(現・東京芸術大学)在学中に設計活動を開始し、東京を中心に数多くの建築作品を生み出した。1946年から1961年まで東京美術学校教授(1949年~東京芸術大学)、1963年から68年までは皇居新宮殿造営顧問を務め、1964年には文化勲章も受章している。吉田は、日本芸術院会館や歌舞伎座(改修)、大阪ロイヤルホテル、外務省飯倉公館、在ローマ日本文化会館といった我が国の芸術文化、政治経済にとって重要な建築物を多数手がけたほか、住宅では岸信介、吉田茂といった政治家、岩波茂雄、鮎川義介といった経営者、中村勘三郎、吉住小三郎、杵屋六左衛門別、水谷八重子といった芸能人、山口蓬春、梅原龍三郎といった芸術家、そして吉屋信子、坂西志保といった作家の邸宅を設計したことで知られ、一般の知名度も高い。そうした施主の性格と関係して、記念館や美術館として用途が変更される例が多く、同時期に活躍した著名な建築家と比較しても、現存する作品、つまり保存や継承の成功例が多い建築家といえる。

[吉田の図面や保存・継承に関する既往研究]

- ・「東京芸術大学美術館所蔵の吉田五十八関連資料について」(大井隆弘、『近・現代建築のアーカイブスとドキュメンテーション』,日本建築学会大会(北陸)研究懇親会,2010)
- ・「吉田五十八設計の住宅作品の現状について」(大井隆弘、『モダニズム住宅の継承とその課題』,日本建築学会大会,2018)

## 2. 研究の目的

そこで本研究は、建築家・吉田五十八の現存する住宅作品を対象として、竣工から現在までの経緯を探り、保存や継承に至った成功事例として蓄積することを目的とする。また、筆者がこれまで行ってきた研究の成果とも照らしながら、吉田の住宅作品全体に照らして、現存作品がどのような特徴をもつのかも検討する。

吉田について、保存・継承事例がまとまって報告されることは、所有者間相互の連携や、今後必要となる修繕等に向けても有用性が高いものと考えられる。また、今後の建物の活用に向けても有用な調査となるよう、土地所有者の履歴に関する調査も実施し、住宅作品の建設前も含めて、より視野を広げて調査を行うこととする。

## 3. 研究の方法

本研究は、建築家・吉田五十八が設計した住宅作品のうち現存する13作品を対象とする。13作品(建設地、建設年)とは、小林古径邸・画室(上越、1934・1936)、杵屋六左衛門別邸(熱海、1936)、長谷川邸(古河、1941)、岩波別邸(熱海、1941)、山川秀峰邸(大磯、1943)、二宮自邸(二宮、1944)、山口蓬春邸・画室(葉山、1948・1953)、太田邸(目白、1954)、吉田茂邸(大磯、1961・\*焼失後再建)、吉屋信子邸(鎌倉、1962)、北村謹次郎邸(京都、1963)、猪股猛邸(成城、1967)、岸信介邸(御殿場、1969)である。

本研究は、以上の13作品について、東京芸術大学・大学美術館所蔵の図面資料を確認した上で、国会図書館を中心に新聞や雑誌等の文献調査を実施し、土地台帳等の土地の履歴調査を実施した。また、現地調査や吉田研究室に勤務した旧室員や所有者、関係者へのインタビューを実施した。

[吉田の作風に関する既往研究]

- ・「論文・吉田五十八」(伊藤ていじ、『吉田五十八作品集』,新建築,1980)
- ・「吉田五十八の住宅作品にみる室内意匠」(大井隆弘、『家具道具室内史(8)』,家具道具室内史学会,2016)

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、以下の3点である。なお、(2)、(3)の概略を図1にまとめて示す。ただし、戦後期の所有者については、新聞や雑誌、書籍で公になっている場合を除き表記を避ける。

(1) 吉田作品における位置付けが明らかになった

既往研究において明らかにされている吉田作品の6つの特徴を主軸として、13作品について各特徴が見られる箇所等を確認し、特に吉田作品における各作品の位置付けを明らかにした。

(2) 保存・継承の経緯が明らかになった

明治後期以降から、現在までの土地所有者の履歴を明らかにした上で、文献調査から土地取得や建物建設の経緯を可能な限り明らかにした。特に、土地所有者の履歴調査では著名な人物が多く確認され、今後の活用の一助になるとと思われる情報が得られた。

(3) 竣工後の改修等の内容が明らかになった

文献調査、所有者や関係者へのインタビューを通して、現在までに実施された主な改修等の工事の有無とその内容を明らかにした。

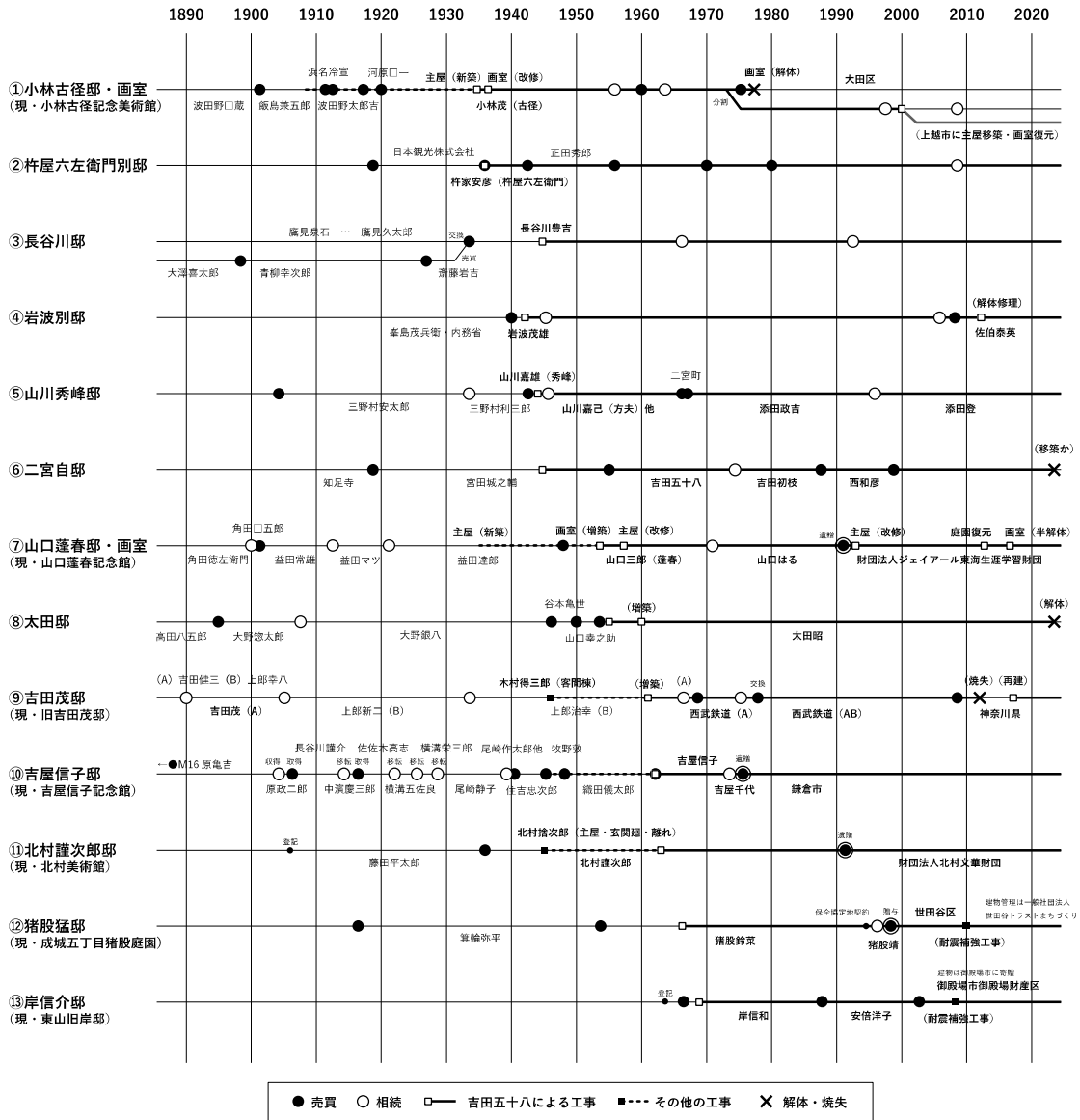


図1 吉田五十八が手掛けた現存する住宅作品の保存・継承の経緯（概略）

現存する吉田の住宅作品は、吉田が設計を手掛けたことに由来する「建築的価値」と、著名な施主の住まいであったことに由来する「歴史的価値」が重なっている。本研究は、この「建築的価値」をより明確にし、また施主に留まらない長期間に及ぶ「歴史的価値」を確認したことであり、近現代住宅の保存や継承の成功例として、ひとつの重要な蓄積になったと考えている。

しかしながら、本研究を進める中でも、二宮自邸（移築予定）、太田邸が解体され、吉田本人の自宅（）、吉田の親族宅（）という、吉田と関わりの深い2棟が姿を消すこととなった。幸い太田邸については解体直前に実測調査を実施できたことから、その成果については今後報告を行う予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大井隆弘	4. 巻 0
2. 論文標題 日本の昭和戦後期にみる上中流住宅の画期について 吉田五十八の住宅作品を例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会大会（東海）建築歴史・意匠部門 研究協議会資料	6. 最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大井隆弘	4. 巻 58
2. 論文標題 吉田五十八の欧米遊学前後の思想的発展 『婦人倶楽部』寄稿記事と「近代数寄屋住宅と明朗性」との比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会東海支部研究報告集	6. 最初と最後の頁 561-564
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大井隆弘
2. 発表標題 日本の昭和戦後期にみる上中流住宅の画期について 吉田五十八の住宅作品を例として
3. 学会等名 日本建築学会大会（東海）建築歴史・意匠部門 研究協議会「戦後昭和の建築-その価値づけをめぐって-」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大井隆弘
2. 発表標題 吉田五十八の欧米遊学前後の思想的発展 『婦人倶楽部』寄稿記事と「近代数寄屋住宅と明朗性」との比較
3. 学会等名 日本建築学会東海支部研究集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------